

て、部屋に戻ってからも体がほかほかしていた。

今回は、フ子湯治が目的で、かつ、せっかくなから日頃の深酒を反省し、この旅行中はアルコール禁止ということにしていたので、必然的に夕食の膳も質素になる。時期的には、蟹！ 蟹！ 蟹！ の季節だったのだが、こぼれくっくと我慢して、体に良さそうな山菜などを味わいつつ、いつもはすでに満腹で手が出ない炊き込みごはんなども、とてもおいしく頂いた。

ただ、普段、酒を飲む身としては、飲まない夜は長い。いや、驚くほど長い。飲めば、二、三時間かかる夕食も、酒抜きだと一時間もかからずにはべろりなのだ。退屈しにぎにひとり川治いの散歩に出かけて戻ってきてても、また八時間前である。さて困ったと思っていると、茹だつたような赤ら顔で、つるんとした卵のようになった友人が、「ああ、気持ちよかったあ」と部屋に戻ってくる。「また、風呂？」と訊けば、「いや、地下の蒸し風呂に入ってきた」という。

なんでもこの宿には地下に貸し切りの蒸し風呂があり、まさに地面からもくもくと湯気が湧き立ち、敷かれた糞の子でのんびりと寝転がれるらしい。

早速、行ってみると、地下に洞窟のような空間があり、ドアを開けた途端にもうもうと湯気が流れ出ている。

蛇口から伸びたホースの水をときどき体にかけながら、しばらく糞の子の上で横になっていると、見る見るうちに汗が噴き出して来る。肩の辺りを軽く手で擦れば、まるで子供の頃、海水浴のあとではろっと皮が剥けたように垢が出る。面白いようにポロポロと。日頃、自分ではちゃんと洗っているつもりでも足りなかったんだなあ、なまと思いながら、さらさらした気分で部屋へ戻ったのだが、話してみれば、やはり



空